

年 組 () 名前

線状降水帯は、積乱雲が次々に発生し、帯状に連なった降雨域。集中豪雨の原因の約6割を占めるとされ、予想外の甚大な被害につながることもある。

予測が困難なのは、台風や梅雨前線に比べて規模が小さいためだ。

一つ一つの積乱雲の広がり、はせいぜい数分・分で、地上を2〜5分・分四方ずつの格子

東シナ海から暖かく湿った空気が吹き込む九州は線状降水帯が発生しやすいため、来

難しい発生予測

に区切って気象データを分析する現状の予測手法では捉えにくい。30分〜1時間ほどの短時間で発生しては消えることや、積乱雲のもとになる水蒸気を大量に供給する洋上に観測網がないことも、予測の難しさに拍車をかけている。

だが、相次ぐ被害を受け、同庁は観測態勢の強化に乗り出した。

年度から観測網の「空白域」である東シナ海に観測船2隻を重点配備し、水蒸気観測を始める。また、全国の地域気象観測システム（アメダス）の半数に当たる約690か所に湿度計を新たに導入し、陸上の観測網も拡充する。

こうして得られた水蒸気などのデータを基に、2年後には線状降水帯の発生半日前に、大雨の確率を地域ごとに

線状降水帯ができる仕組み
(イメージ)

3. 上空の風で流される

長さ約50〜300km、
幅約20〜50kmの
帯状に連なる

2. 積乱雲が次々と発生

一つの積乱雲の
寿命は30分〜1時間

1. 暖かく湿った空気がぶつかり上昇

海

4. 局地的な豪雨

(2020年11月19日 読売新聞朝刊より)

◆深刻な水害をもたらす「線状降水帯」が発生した際に警戒を呼びかける運用を、気象庁が6月17日から始めました。ただ、現状では正確な予測は困難とされています。

大規模水害を引き起こす「線状降水帯」の発生を自動検出するシステムを開発したと、国立研究開発法人・防災科学技術研究所や日本気象協会などの研究チームが11日、発表した。気象庁はこの技術を活用し、17日から線状降水帯が発生した際に警戒を呼びかける「顕著な大雨に関する

線状降水帯 自動で検出

17日から運用

情報」の発表を始める。

線状降水帯は、積乱雲が次々と発生して帯状に連なった雨域。チームは雨量データなどをとくに、大雨災害の危険度が急激に高まっている雨域を自動的に特定する技術を開発した。

(2021年6月12日 読売新聞朝刊より)

【1】線状降水帯とは何ですか。

【2】線状降水帯の発生予測が困難な理由を3つ挙げましょう。

【3】次のうち内容が間違っている文の番号をすべて書きましょう。ない場合は⑤としてください。

- ①線状降水帯の発生を予測する「顕著な大雨に関する情報」を発表する運用が始まった。
- ②気象庁は、2023年を目標に線状降水帯の発生半日前の情報提供を始めたい考えた。
- ③線状降水帯は、集中豪雨の原因の約6割を占めるとされる。
- ④気象庁は、観測網の「空白域」の南シナ海で水蒸気観測に乗り出した。